

奥村五百子(おくむらいおこ) (1/2)

～傑出した婦人運動家～

弘化2年(1845年)、唐津城下中町高徳寺の住職奥村了寛の長女として五百子は、生まれました。小さいときからお転婆で男の子の先頭にたって遊んでいました。いじめられている子がいると、生来の正義感から男であろうが女であろうが年上の者であろうが、相手かまわず立ち向いました。

18歳のとき、勤王派(注1)の父了寛の頼みで長州(今の山口県)まで密書(秘密の手紙)を届けることになりました。男武者に身なりを変えて長州に向いました。赤間が関(今の山口県下関)を通過しようとしたとき警備の者につかまり、通せ通さぬと押問答をしていると奇兵隊(注2)隊長高杉晋作(注3)が通りかかりました。これは好機だと思った五百子は、初めて会う晋作に向かって「高杉先生よいところでお目にかかりました。唐津の奥村です。父のいいつけで来ました」と声をかけました。晋作は唐津の奥村が勤王の志士(注4)として活動しているのを知っていたので、話をきき無事役目を果たせるよう取り計らいました。五百子は、この後西郷隆盛(注5)とも出会い、勤王の志士たちの連絡に走り回るようになりました。

(注1) 江戸時代の末、天皇を中心とした政治をめざした人々

(注2) 幕末、長州藩で組織された軍隊

(注3) 幕末、長州藩で活躍した武士

(注4) 江戸幕府を倒そうという志を持ち、活動した人

(注5) 幕末・明治維新の時代活躍した政治家。薩摩藩出身の武士

明治維新を経て、第1回衆議院議員選挙のときには、旧唐津藩の下級武士の出身の天野為之(注6)を推し、自ら指揮をとり見事当選させました。この五百子の働きは唐津の人々を驚かせました。

生来の正義感と世話好きから、隣近所の夫婦げんかから唐津の町のもめごとまで口を出し、唐津で解決できぬことがあると上京し、旧唐津藩主の小笠原長生を通じ中央の政治家や実力者に協力をお願いしました。総理大臣大隈重信も五百子から頼まれるといやとはいえず協力をしました。

(注6) 経済学者として活躍。早稲田実業学校の創設に力を尽くした

五百子は郷土唐津のために多くの仕事をしていますが、主なものとして、松浦橋架橋、西唐津開港指定、鉄道唐津線開設。海軍貯炭場(舞鶴公園下)払下げなどがあります。

町の人たちが1番望んだのは松浦川に橋をかけることでした。対岸の満島(今の唐津市東唐津地区)に行くには渡し舟しかなく不便で仕方ありませんでした。架橋に必要な用材を確保するため五百子は上京し、岸岳官有林(国の所有する森林)の払下げを陳情しました。五百子の郷土思いの熱意が通じ、官有林払下げが許可されました。その結果工事が実施され、九州一の長い松浦橋が明治29年(1896年)に完成しました。出しゃばり婆さんと陰口をたたいていた人でさえも「五百子は唐津の宝だ、日本一の女傑だ(男まさりの女性)」とほめたたえました。

～2/2へつづく～

分野 人物

地域 唐津

◎地図・写真・統計資料など



奥村 五百子
(1745～1907)

(『郷土につくした人々』より)

◎引用・参考文献(出典)

◆『郷土につくした人々』
～ふるさと唐津の偉人たち～

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html

奥村五百子(おくむらいおこ) (2/2)

～傑出した婦人運動家～

～1/2からつづく～

明治33年(1900年)北清事変(注7)がおこりました。戦地へ慰問団(注8)を送ることになり、ただ一人女として慰問団員として北京へ向いました。戦場となった場所を回り、戦争のむごたらしさ、戦闘のすさまじさを体験しました。帰国した五百子は、小笠原長生を訪れ「戦死した兵士の遺族は働き手を失い、国の手当があるとはいえ、明日からどうして暮らしていくか途方にくれています。これらの人たちを温かく助けていくのは国民の務めです。この婆はなぜ戦争せねばならぬか分かりません。女の私がしなければならぬことは、戦争で傷つき嘆き悲しむ人に手をさしのべることです。そのため軍人遺族救護の婦人団体をつくることにします。」と訴えました。さっそく準備が進められ明治34年(1901年)、愛国婦人会の発会式が行われました。席上五百子は「半襟(和服の下着の襟につける飾りの布)1つ買う金を節約して献金してください。それを集めて遺族を慰める資金にします。全国の婦人がこぞって賛同くだされば大きな資金となります。どうかこの会にお入りください」と訴えました。胸を病んだ老婆が、薬瓶を持参し、極端に経費を切り詰め「半襟一本運動」を遊説して回ったのです。その熱意が人の心を動かししました。

(注7) 当時の中国、清と日本など8カ国の連合軍との戦い。義和団事件ともいう

(注8) 戦場の兵士を見舞って励ました人々

日露戦争の慰問の時には、激戦地を訪れ、敵味方の別なく念仏を称え、平和を祈りました。このような中、五百子の病状は限界に達し、療養生活を送りますが、病状はさらに悪化し、明治40年(1907年)五百子は、63歳の生涯を静かに閉じました。

第二次世界大戦後、日本の軍国主義に対する反省の中で、五百子の業績を批判する人もいますが、五百子の考えの根底に流れているものは弱者へのいたわりです。女性の地位が低かった明治時代に、類まれな行動力を持って活動した五百子の生き方は現在の私たちに大切なことを伝えています。

分野 人物

地域 唐津

◎地図・写真・統計資料など



奥村 五百子の像
(唐津市東城内)

(『郷土につくした人々』より)

◎引用・参考文献(出典)

◆『郷土につくした人々』
～ふるさと唐津の偉人たち～

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html